

古代エジプトの物語の中にみる女性像

吹田 真里子 *

Image of Women in Ancient Egyptian Stories

Mariko SUITA*

[Abstract]

In this paper, I focus on images of women in the “stories” of ancient Egyptian literature to reconstruct some reality of female life, unlike the stereotyped description as ideal.

First, the literature is considered from the Old Kingdom to the Third Intermediate. Ancient Egyptian literature means not only literature in our time but also literal documents in general except ones of economic activities. The genres which women appeared are “inscriptions from private tombs,” “didactic literature,” and “stories.”

Description relating to women in “inscriptions from private tombs” is found in prayer for offerings, and in succession of property in will of male owner’s tomb. The inscriptions show that there is no difference between men and women in prayer for offerings, and it was possible for women to involve succession of property by themselves. Unlike “inscriptions from private tombs,” “didactic literature” has the stereotyped image of women: for example, how men should treat women.

This paper focuses on “stories,” not only on two genres mentioned above because this genre may elucidate some part of female position in society by how men express women in stories. Considering six stories in this paper, 16 words which are connected to women are found. Among them, the most frequent word is “wife” (*hmt*). However, women in the position of “wife” were not mostly expressed in good way. The women called “mother” (*mwit*), who were referred to next to “wife,” did not influence upon plots.

Moreover, other types of women are found; one is women who pleased men, another is one who occupied profession. In addition to these images, the words which mean feeble women (widow (*h3rt*) and divorced woman (*wgʿt*)) were used as examples of who needed protection of men.

The variety of words which were used around women gives a part of reality about the diversity of female life of that time. Moreover, by collecting examples of women’s activities, they help to approach a part of real role of women in society.

[要旨]

本稿では、古代エジプトの物語のなかで女性についての表現に焦点を当てることにより、理想的にステレオタイプ化された女性像ではなく、実際の女性像の一端を構築する試みを行った。

* 関西大学文化財保存修復研究拠点 (非常勤研究員)

(Institute for Conservation and Restoration of Cultural Properties, Kansai University, Japan)

まず、古王国時代から第三中間期に記された文学作品から検討を行った。古代エジプトでは現代と異なり、文学という言葉が意味する範囲は広く、経済活動に関する文書を除いた文字資料を指す。女性は、「私人墓に記された碑文」、「教訓文学」、「物語」のジャンルに現われた。

「私人墓に記された碑文」のなかでの女性に関する記述は、決まりきった供養文と、男性の遺書の財産相続の項目のなかにもみられる。これらから言えることは、供養文には男女の違いはなく、また財産相続においても、女性が自分の意志で行うことは可能であったといった女性像がみられる。これとは異なり、「教訓文学」では、男性がどのように女性を扱うべきかといったステレオタイプ化された女性のイメージが多い。

本稿では、このような文学ジャンルに限定せず、「物語」のジャンルに焦点を当てた。これは、男性によって書かれた物語のなかにも、女性がどう表現されているのかという視点から、実社会で女性がどう位置づけられているのかをある程度うかがい知ることができる可能性があるためである。本稿で取り上げた6つの物語のなかで、女性に関する単語は、16種類見つけることができた。その中でも、1番多く取り上げられていた女性の登場人物は「妻」(*hmt*)であったが、この立場で良く表現された人物はまれであった。「妻」の次に多く登場した人物は、「母親」(*mwrt*)であるが、話の筋には大きな影響を与えることはなかった。

これらの他には、男性を楽しませるための女性の存在や、職業に従事していたと思われる女性を見つけることができた。さらに、弱い立場の女性を表す単語で、「未亡人」(*h3rt*)や「離婚した女性」(*wgrt*)もあり、男性の保護を必要とする例として挙げられていた。

女性を表す単語の種類から、当時の多様な女性像の現実がうかがえる。さらに、女性が従事した仕事の例を集めていくことにより、社会における女性の現実的な役割の一端の解明にアプローチすることができるであろう。

1 はじめに

古代エジプト社会における女性は、メソポタミアなどのような同時代の他の国々の女性と比べて注目される機会が多い。これは、ハトシェプストやネフェルティティ、クレオパトラといった女王や王妃の存在や、視覚的な点からいっても、像¹や壁画に残されているレリーフ²に見られるように、多くの女性たちが男性と並んで同じ大きさで表現されていることから、あたかも女性が男性と同等の権利を持っていたかのように素朴に思われていたためである。しかしながら、絵画や彫刻などの芸術のなかでの人物像は、ステレオタイプ化されたものであり、それらの中から実際の女性像を見出すことは難しいのが現実である。近年、このステレオタイプ化された女性像を訂正しようとする動きがあり、それに関しては、拙稿「エジプト古王国時代の遺書にみる女性の立場」『オリエント』(第46巻第1号、2003年、103-17頁)の「はじめに」で述べている。

上記の論考では、具体的に女性がおかれていた社会的立場を考察するために、彼女たちが行使できた法的権利の一つ、財産相続について述べた遺書(*imyt-pr*)に焦点を当てた。この結果、女性は財産相続において自分の意志を表現することが可能であり、経済面において自立することができた女性が存在したということが判明した。

本稿は、引き続き女性像の構築を目指し、文学の中の女性に焦点を当てることとする。前述した絵画

1 この特徴は夫婦の像に多く見られ、例えば、古王国時代第4王朝のラーホテプとネフェレトの像が挙げられる。*Official Catalogue, The Egyptian Museum Cairo, Mainz am Rhein, 1987, pp. 60-61.*

2 アンテフのステラ。*Ibid.*, p. 129. このステラにも夫婦が同じ大きさで描かれている。

や彫刻といった美術と同様、文学でも理想的にステレオタイプ化された女性が表現されていると考えられている。この代表的なものが、教訓文学のなかに見られる女性の記述であり、女性のあるべき姿や、男性が女性に対してとるべき態度が挙げられている³。しかし、このような教訓文学のステレオタイプ化された女性と違って、物語のなかの記述には、書記が女性をどのように表現しているのかということを検討することによって、当時の実際の女性像を構築する手がかりとなると思われる。

2「古代エジプトにおける文学」では、古王国時代（前2686年～2181年頃）から第三中間期（前1069年～747年頃）に書かれた文学をジャンル別に分け、女性がどのジャンルの文字資料に登場するのかを考察する。そして3「物語にみる女性に関する記述」では、書記の意図が反映されるであろう物語に焦点を当て、女性が登場する6つの物語、「雄弁な農夫の物語」、「ウェストカー・パピルスの物語」、「二人兄弟の物語」、「ウェンアメン旅行記」、「不運な王子」、「マアト（真実）とゲレグ（嘘）の物語」のなかで、女性がどのような役割で物語に関わっているのかを考察する。4「女性に関する表現」では、3「物語にみる女性に関する記述」でみた物語に登場する女性は、どのような単語で表現されているのかを考察する。その結果、物語のなかでの男性による当時の女性の捉え方から、実社会での女性像を解明する一端となるであろう。

2 古代エジプトにおける文学

古代エジプトで言われる文学とは、現代で言う文学的なものを意味するだけでなく、文書になっているもの全般を指し、その内容は、経済活動に関する文書を除いたもので構成される⁴。これをジャンルに分けると次のようになると思われる。1) 私人墓に記された碑文、2) 宗教文書、3) 年代記や法令、4) 神や王に対する讃歌、5) 教訓文学、6) 物語である。これらの中で、女性の記述があるのはどのジャンルになるのだろうか。

まず、1つ目のジャンルである私人墓に記された碑文は、古王国時代に現れる。その碑文には、供養のための祈りや、墓の持ち主の自伝が書かれていることが多い。これらの大部分は男性に関するものであるが、女性に関する碑文は2点挙げることが可能である。古王国時代第4王朝メチェンの墓の壁に書かれたものと、古王国時代第5王朝初期のニーセジェルカーのmastabaの壁に書かれたものである。

第一点目の碑文は、第3～4王朝に官吏であったメチェンという名前の男性のmastabaに書かれている⁵。そこには、彼の経歴、彼に関する財産相続、そして彼が就いた官職が記されている。この中で女性に関する記述は、メチェンの母親に関するものである。

50アルーラ(約14ヘクタール)の耕地が(メチェンの)母親、セブセネトによって彼に与えられた。彼女はその土地に関して、(彼女の)子供たちに遺書を作成した。

3 G. Robins, *Women in Ancient Egypt*, London, 1993, pp. 176-77.

4 エジプト文学のジャンル分けには次の文献を参照。W. K. Simpson, ed., *The Literature of Ancient Egypt*, New Haven, 2003, pp. 1-10; M. Lichtheim, *Ancient Egyptian Literature*, Vol. 1, Berkeley, 1973, pp. 3-12.

5 この碑文の内容については、吹田真里子、「エジプト古王国時代の遺書にみる女性の立場」『オリエント』(第46巻第1号、2003年)、108-10頁を参照。

この墓の持ち主は男性であり、碑文もその持ち主に関するものの中に一部みられるものである。ここでわかることは、女性でも遺書を作成することができ、財産を自分の意志で譲渡することが可能であったことである。

第二点目の碑文は、ニーセジェルカーの碑文である。このマスタバは、若くして亡くなった娘のために父親が建造したと考えられている⁶。このマスタバに記されている碑文は、供養文にみられる代表的なものである。

王が与えた供物、アヌビス、ネクロポリスの主、神の部屋の第一人者、彼女が十分に年をとって西のネクロポリスに埋葬されますように。彼女が、尊崇されし者が旅する良い方法で旅をしますように。

新年の祭、トト祭、年の最初の日の祭、ワグ祭、ソカル祭、火の大きな祭、火桶を置く祭、ミンの行進の祭、毎月のサヂ祭、月の初めの祭、半月の初めの祭において、すべての祭の時に毎日、彼女へのパン、ビール、雄牛、家禽（を含む）声による供物、王の娘、王の装飾品（称号）、ニーセジェルカー。

祭の名前などはそれぞれの墓によって変動があるが、「王が与えた供物」で始まる碑文は、マスタバの柱廊玄関の梁などに書かれることが多く、これに関しては男女を問わず、主な内容は同じである。

2つ目のジャンルは、「ピラミッド・テキスト」に代表される宗教文書である。古王国時代の王や王妃のピラミッドの内部に記されるようになったこのテキストは、中王国時代には「コフィン・テキスト」や、新王国時代には「死者の書」へとつながっていくものである。これらの文書には、死者が来世に行く際の儀式や呪文などが記されており、登場人物で女性に関するものといえば、女神に関してのみであり、本稿では実際の女性像を構築することが目的のため、女神については言及しない。

3つ目のジャンルは、王による年代記や法令といった類である。これには古王国時代のペピ1世による法令や、新王国時代ではルクソールのカルナック神殿の壁に記されているトメス3世による年代記が挙げられる。さらに4つ目のジャンルの神や王に対する讃歌であるが、これは中王国、新王国時代に多く見られるものである。これらの政治的な記述のジャンルには、当然ながら、男性が登場する。

5つ目のジャンルは、教訓文学とよばれるものである。これは古王国時代末に宰相による教訓が記され、後には王による教訓も現われた。これらの教訓のなかには、女性に関する記述が多く見られる。

第5王朝末に記された最古の教訓文学である「宰相プタハホテプの教訓」⁷は、第5王朝のジェドカーラー王の時代に宰相であったプタハホテプが、彼の息子に示した教訓という形式で書かれている。教訓の数は37カ条あり、序章と結びの章がついている。彼の教訓には、数箇所女性に関する記述がある。この教訓は基本的に男性のために書かれたものであり、女性に関する記述と言っても男性がどのように女性を扱うべきかといった教訓が多い。第18条では、男性は人妻に近づくべきではない。そして第21条では、妻を愛し、彼女の腹を満たし、衣服を着せ、彼女を喜ばすようにと述べている。一方、第1条の教訓では男性がどのように女性を扱うかというより、女性自身のなかに価値を見出した表現が見られる。

6 H. Junker, *Giza*, II, Leipzig, 1934, p. 97; M. Lichtheim, *op. cit.*, pp. 15-16.

7 *Ibid.*, pp. 61-80; K. Sethe, *Aegyptische Lesestücke*, Leipzig, 1928, pp. 36-42.

第1条

あなたの知識のために傲慢になるな。あなたは物知りであるということを信用するな。物知りと同じように無知な者とも相談せよ。人は技術の限界に達しない。熟練した技術を備えた技術者はいない。良い言葉はお守りよりも隠されている。それは石臼のそばの召使(女性)とともに見出される。

これは話術を上達させるためには、博学な者とだけでなく、無知な者とも話すようにし、召使(女性)と話すことによっても話術のコツは得られると述べている。わずかながらでも、このように男性が女性をどのように捉えているのかがわかる1例である。

そして6つ目のジャンルは、現代で言う文学、例えば「シヌへの物語」や「雄弁な農夫の物語」などである。これらの物語は中王国時代に創られたものであるが、これ以降いくつかの文学作品が現存している。これらの登場人物はほとんどが男性であるが、男性の書記が、女性を物語のなかでどのように描いているのかを考察することにより、女性たちのあり方が窺えると思われる。

3 物語にもみる女性に関する記述

現存している物語のなかで、女性が主役になっている物語は存在しないと思われる。そのため、ここでは、物語の中で女性が出てくるものを取り上げることとし、「雄弁な農夫の物語」、「ウェストカー・パピルス物語」、「二人兄弟の物語」、「ウェンアメン旅行記」、「不運な王子」、「マアト(真実)とゲレグ(嘘)の物語」を考察する。なお、「ホルスとセトの物語」のように女神が登場する物語も存在するが、本稿では現世をテーマとしたものに限定した。

3.1 「雄弁な農夫の物語」⁸

まず、中王国時代(前2055年～1650年頃)のパピルスに書かれている第10王朝のネブカウラーの時代の「雄弁な農夫の物語」である。この物語は、主人公の農夫であるクウエンアンプウが食料を得るために、塩や材木やヒョウの皮などを町に売りに行こうとした道中で、家令頭の息子を知り合いに持つ男トトネクトに言いがかりをつけられ、売り物をすべて取り上げられた。クウエンアンプウが、彼の悪行を家令頭の息子に9度に渡り訴えたところ、彼の雄弁な訴えに感動した家令頭の息子は、王に伝え、最後にはクウエンアンプウの訴えは聞き入れられた。クウエンアンプウは自分の売り物を取り戻し、その上、トトネクトの財産までも手に入れたという物語である。この物語は古代エジプトの物語のなかでも重要なものであり、いくつかのパピルスの断片を組み合わせる必要があるとはいえ、最初から最後まで現存しているものである。この物語のなかで女性に関する記述は次の部分である。

物語の冒頭

クウエンアンプウという名前の男がいました。彼は塩の畑(ワディ・ナトロン)の農夫で、メレットという名前の妻(*hmt*)がいました。そこでこの農夫は、この彼の妻に言いました。「見よ、

8 M. Lichtheim, *op. cit.*, pp. 15-16; W. K. Simpson, *The Literature of Ancient Egypt*, New Haven, 1972, pp. 31-49; A. Erman, *Literarische Texte des Mittleren Reiches*, I, Leipzig, 1908.

私は、私の子供たちのために、食料を持ってくるためにエジプトに下りて行くところです。行って、私のために倉庫にある[欠]の大麦の残りの大麦を計ってきなさい。」そこで彼女は彼のために、大麦を[欠]へカト計りました。そこでこの農夫は、この彼の妻に言いました。「見よ、〈あなた〉と子供の食料として大麦 20 へカト[欠]。この大麦 6 へカトを私のために、毎日のパンとビールにきなさい。

〈〉の部分は筆者が補った。

第 2 回目の訴えの中で

あなた（家令頭の息子）は孤児にとっての父親であり、未亡人 (*h3rt*) にとっての夫であり、離婚した女性 (*w3t*) にとっての兄弟であり、母親 (*mwt*) がいない者にとっての前掛けである。

女性に関する記述では上に挙げた箇所以外に、第 2 回目の訴えのなかで、「疫病の女主人」(*nbt idw*)、また第 7 回目の訴えの中で「正義の女神」(*m3t*) といった単語がみられる。この「疫病の女主人」は、セクメト女神を表す言い方であり「正義の女神」と同様、女神として捉えられるため、本稿では考察の対象に入れない。

これらの結果、女性の登場人物は妻一人であり、話の筋には重要な役割を果たしているとは考えられない。また第 2 回目の訴えの抜粋に関しては、家令頭の息子が偉大な人物であり、弱者にとっての保護者にあたる役人であるため自分（クウエンアンプウ）の訴えを聞き入れてほしいという内容である。ここで挙げられている弱者にとっての保護者の例として、未亡人には夫が、離婚した女性には彼女の兄弟が、必要であると述べている。これらの例から、女性は、男性の保護者を必要とすると考えられていたことを暗示している。

3.2 「ウェストカー・パピルス物語」⁹

次に取り上げる物語は、「ウェストカー・パピルス物語」である。これは中王国時代に成立した物語であると思われるが、内容は古王国時代のクフ王に、王子たちが不思議な物語を語るという形式で物語が描かれている。このパピルスは破損部分が多く、現存する物語は 5 話で構成されており、女性に関する記述は 2・3・4・5 番目の話にみられる。

2 番目の物語は、王子カフラーが、ネブカー王の時代に起こった奇跡についての物語である。この話の筋は、以下の通りである。第一朗読神官ウバイネルの妻が浮気をしたために、ウバイネルは蠟でできたワニを作り、池にその蠟のワニをはなした。すると蠟のワニは本物に変わり、妻の浮気相手の男性をつかまえ、池の底に連れて行ってしまった。そしてウバイネルは、王の前で池の底から彼をワニに連れてこさせ、ワニを蠟のワニに戻した。これを見た王は、ウバイネルの妻を焼き殺し、その灰を河に投げ捨てさせた、というものである。

この話の中に登場する女性は、夫を裏切る妻 (*hmt*) と彼女の女中 (*wb3yt*) である。女中はウバイネルの妻に仕えているだけで、物語の筋には関係がない。この物語の目的は、第一朗読神官ウバイネルに

⁹ M. Lichtheim, *op. cit.*, pp. 215-222; A. Erman, *Die Sprache des Papyrus Westcar*, Leipzig, 1889; A. Erman, *Die Märchen des Papyrus Westcar I and II*, Berlin, 1890.

よって行われた奇跡を示すものであるが、ウバイネルの妻は、夫を裏切った女性として描かれ、最後には焼き殺されてしまうのである。この物語のなかでは、女性は悪者として表現されている。

次は、3番目の物語である王子パウエフラーが、スネフル王の時代に起こった奇跡について語る物語である。この物語の中では、退屈していた王を楽しませるために娘たちに舟遊びをさせていたところ、そのうちの一人の娘が池に耳飾りを落とした。それを拾うために第一朗読神官が呪文を唱え、池の水の半分がもう半分の上に重なり、耳飾りを見つめることができたという物語である。次にあげる箇所が、娘たちに関する記述である。

私(王)は舟遊びをしよう。金で装飾された黒檀の櫂を20本もってこさせよ。その柄は、上質な金で飾られた貴重な木でできたものだ。体の美しい、美しい胸と巻き髪をした¹⁰、子供を産む前の20人の娘たち(*st-hmwt*)を連れてきなさい。そして、20枚のネット¹¹を私に持ってこさせなさい。そしてこの娘たちに彼女達の衣服の代わりにこれらのネットを与えなさい。

この話のなかでの女性は、男性を楽しませるためによばれた女性たちの存在を示している。このように第2・3話からは、女性は男性が奇跡を起こすために必要な流れで登場させられており、尊敬されるようには描かれていない。

4番目の物語は、王子ジェドエフホルがクフ王にむけて話した奇跡を行う男¹²、ジェディの物語である。これは、第5王朝の諸王の誕生、つまりウセルカフ、サフラー、ケクウ(ネフェリルカラー?)¹³が誕生するところを物語にしたものである。

このジェディという名の男は奇跡を行うことで知られており、切り落とされた頭をもとどりにつけることができると言われていた。彼に興味を持ったクフ王が彼に会いたいと望んだため、王の前に連れてこられた。なぜなら王は、以前から探しているトト神の聖所の秘密の部屋の数を知りたかったためである。ジェディがいくつかの奇跡を見せた後、王は彼に聖所の秘密の部屋をたずねた。ジェディはそのことについては知らないが、その答えはヘリオポリスにある箱の中にあると答えた。この箱をジェディに持ってくるように言ったところ、これを持ってくるのは、レドジェデドという名の女性の体内にいる3人の子供の長男が持ってくるかと答えた。この3人の子供が後の第5王朝の諸王、つまりウセルカフ、サフラー、ケクウ(ネフェリルカラー?)である。この第4話はレドジェデドがお産をむかえるまでで終わっている。

この物語の中で登場する女性は、3人の王子を身ごもったレドジェデドという人物である。彼女はウアブ神官の妻(*hmt w'f*)であり、3人の王子の母親となる役割は与えられているが、それ以上の内容は書かれていない。

この話には続きがあり、5つ目の物語として3人の王の誕生が語られている。レドジェデドは難産で

10 A. Erman, *op. cit.*, I, pp. 35-36.

11 ここでいうネットとは、服の上に着る真珠でつくられたネットのことを意味する。M. Lichtheim, *op. cit.*, p. 222.

12 ジェディという人物の身分や肩書については、原文が判読不可能であるためわからない。「魔法使い」と呼ばれることが多い。

13 A. Erman, *op. cit.*, II, p. 27.

あったが、イシス、ネフティス、メスケネット、ヘケト、クヌムの神々に助けられ、お産を行った。無事に3人の息子が産まれてしばらくの後、レドジェデドと女中 (*wb3yt*) が喧嘩をし、レドジェデドが女中を罰した。そこで女中は、レドジェデドが3人の王を産んだことを、クフ王に密告しに行こうとしたところでワニにさらわれてしまった。

ここで写本が終わっているので、話の結末はわからない。この話では、女性の登場人物として、ウアブ神官の妻であり、3人の王子の母親としてのレドジェデドと、彼女の女中がでてくる。この物語での彼女達の役割は、女中を折檻した女主人と、彼女に恨みを持った女中が、王に密告しに行こうとしたところでワニにさらわれるという、どちらの女性に対しても良い印象を持つことはない登場人物となっている。

3.3 「二人兄弟の物語」¹⁴

次の「二人兄弟の物語」は、第19王朝末に書かれたと思われる物語で、完全な形で残されているめずらしい物語である。話の筋は、アンプーとバータという兄弟が一緒に住んでいた。兄はすでに結婚しており妻 (*hmt*) がいたが、弟は独身だった。ある日、兄弟で畑仕事に出かけたが、途中で用事があり弟が家に戻ると、兄嫁が彼を誘惑した。しかし、弟は兄のことを大切に思っていたため、「あなたは私にとって、母 (*mwt*) のようなものだ」と言って彼女を拒絶し、このことを兄にも黙っていた。しかし、兄嫁は弟が夫に告げ口するのではないかと思い、夕方家に帰ってきた夫に弟に乱暴されたと嘘を言った。兄は妻を信じて弟を殺そうとしたが、弟は「あなたは恥知らずな女 (*k3t t3hwt*) の話を信じて私を殺しに来たのですか。」と言って兄に対抗した。その後、兄は妻が嘘をついていたことを知り、妻を殺して犬に食べさせた。

一方、バータは別の地で生き、神が創ってくれた国中で1番美しい女 (*st-hmt*) をつれあい (*irt hmsi*) にし暮らしていたが、彼女のことを知った王が、ある女性 (*st-hmt*) に宝石を持たせて使いにやり、彼女を誘惑した。彼女はバータを裏切って王についていき、王によって「大いなる高貴な女性」 (*špst ʕt*) という称号を与えられた。弟は王によって殺されてしまったが、悔んでいた兄の助けで復活し、牡牛の姿に変身した。牡牛となった弟は、この姿で高貴な女性 (*špsyt*) (バータの元妻) の前に現われ、自分はあなたの夫だったバータであると告げた。彼女は王に言ってこの牛を殺させたが、この時に飛んだ2滴の血が樹になり、再び彼女に話しかけた。そのため彼女は、王に頼んでその2本の樹で家具を作ってくれるように頼んだ。王は彼女の願いを聞き入れ、樹を切り倒したところ、木くずが彼女の口の中に入り、彼女は妊娠した。その子供は、後に王子となりそれまでの経緯を国の役人に話した。彼女は連れてこられ、裁きをうけさせられた。後にバータはエジプトの王になって統治した、という話である。

この物語では、女性の登場人物は兄の妻と、バータの妻と、王の使いの女の3人で、物語に大きく影響を与える女性は、主に前者の二人にしばられる。この物語のなかで、女性が良く書かれることはなく、男性を誘惑したり、宝石につられて夫を裏切る人物として描かれている。

14 A. H. Gardiner, *Late-Egyptian Stories*, Bruxelles, 1981, pp. 9-30; M. Lichtheim, *op. cit.*, II, 1976, pp. 203-11; J. B. Pritchard, *Ancient Near Eastern Texts*, Princeton, 1969, pp. 23-25.

3.4 「ウェンアメン旅行記」¹⁵

次に取り上げる物語は、「ウェンアメン旅行記」である。これは、第3中間期の第22王朝に記されたパピルスで、内容は以下の通りである。ウェンアメンという名の男性が、アメン神の船を建造するための木材を、レバノンに調達しに行く間の過程を描いた物語である。ウェンアメンはレバノンに向けてエジプトを出発し、ある町で材木を購入するための金を自分の部下に盗まれてしまう。ウェンアメンは、その町の君主に金を弁償してくれるように訴えたが、君主は自分の国の人間が盗んだのではないので断り、他の船から奪うことを提案した。その通りにしたウェンアメンはやっとレバノンに到着したが、その君主は、ウェンアメンを信用せず、なかなか材木を用意しなかった。やっと材木を調達できてエジプトに帰ろうとしたが、金を奪った船の国の者が追ってきた。ウェンアメンが嘆き悲しんだので、君主は彼を慰めるためにエジプトの歌い女 (*ḥsit*) を彼のもとに送った。その後、追いかけてきた者たちから逃れたウェンアメンは、キプロスにたどりついた。そこで君主の娘 (*wrt*) に会い、助けを求めた。彼女は自分の女王 (*ḥnwt*) に言うように言った、とここで話は途切れている。

この話の中では、女性の登場人物はエジプトの歌い女と君主の娘と女王である。君主の娘が関わった話はここから始まり、町の人々を集めてウェンアメンを助けようとするのであるが、パピルスが無くなっている。

3.5 「不運な王子」¹⁶

次の「不運な王子」という物語は、新王国時代第19王朝に成立したものである。話は、子供がいなかった王が神に祈願すると妻 (*ḥmt*) が身ごもった。そして王子が誕生すると、ハトホル女神たちがやって来て、彼がワニか、蛇か、犬によって死ぬ運命にあると言った。そこで、王は王子のために砂漠に家を建て、そこから外に出さず彼を育てた。少年になった頃、王子は屋根の上から人が犬を連れているのを見て興味を持ち、子犬を飼った。そして青年になると、外の世界に出たいと王に言って、犬とともに家を出た。王子がナハリンの国に着くと、その国の王子の一人娘 (*šrit st-ḥmt*) が、高い所に窓のある塔に住まわされており、この窓に届くことができれば、彼女と結婚ができると言われていた。何人もの男性が挑戦しているところに出くわし、彼は自分のいきさつについて皆に話した。自分の母親 (*mwt*) が死に、父親は再婚したが継母 (*iit-msyt*) が自分を嫌うので家を出た。皆は彼を受け入れ、彼も塔の窓へのジャンプに挑戦することになった。今までの挑戦者は失敗に終わっていたが、この「不運な王子」は一度で成功した。彼は結婚した後、妻に自分の運命、つまりワニ、蛇、犬に関する話をした。そこで妻は、これらには気をつけ、一人では外出をさせなかった。ある日、蛇が王子を咬もうとしたが、妻の機転によって回避された。そして何日か過ぎた後、王子は一人で犬を伴って出かけた。ここでもう一つの運命であるワニと出くわすことになるのだが、パピルスはここで失われている。

この話の中に登場する女性は、王子の母親と継母、そして後に彼の妻となるナハリンの王子の娘である。主人公の継母は悪い人物として描かれ、彼の妻は夫に尽くす妻として描かれている。

15 A. H. Gardiner, *op. cit.*, pp. 61-76; M. Lichtheim, *op. cit.*, II, pp. 224-30; J. B. Pritchard, *op. cit.*, II, pp. 25-29.

16 A. H. Gardiner, *op. cit.*, pp. 1-9; M. Lichtheim, *op. cit.*, II, pp. 200-03.

3.6 「マアト（真実）とゲレグ（嘘）の物語」¹⁷

次の物語は、「マアト（真実）とゲレグ（嘘）の物語」である。これは、新王国時代第19王朝に書かれたものである。パピルスで15ページ分の物語であるが、最初の4ページは空白が多いが、話の内容は以下の通りである。マアトという「真実」を意味する名前の兄と、ゲレグという「嘘」を意味する名前を持った弟の物語である。兄は弟から短剣を借りるが、失くしてしまった。そこで弟は九柱神に兄を訴えたのであるが、貸した普通の短剣を、大変素晴らしい短剣であったと嘘をついた。その結果、弟の訴えが通り、短剣を失くした兄は盲目にさせられ、弟の家の門番にされた。それから何日も経って、弟は召使に、兄をライオンに投げ与えるように命じた。（途中、空白が多く、話はわからないが、マアトはライオンから生還する。）何日も経って、ある女性（本文中に4回この単語が出てくるが、決定詞のみ判読可能）に出会い、マアトは彼女の家の門番をすることとなった。彼の身なりはみすぼらしかったが、大変にハンサムだったので、二人の間には息子が生まれた。マアトは、素性がわからなかったため、門番にさせられたままであった。その女性は父親のことは息子に内緒にしていたが、息子が尋ねたため、真実を話した。息子は母親 (*mwt*) を責め、父親を家に迎え入れ、父の弟に復讐を誓った。息子は、父の弟が短剣の貸借で不正を行ったのと同じ方法を牛を用いて行い、父の冤罪を晴らした。ゲレグは盲目にされ、マアトの家の門番にされた。

この話の中で、女性の登場人物はある女性、後に息子の母親となる人物である。彼女は自分の夫を大切にしない薄情な女性として描かれている。

ここでは6つの物語のなかに、どのような女性が描かれているか考察した。次に、これら登場人物によってどのような傾向があるのか検討する。

4 女性に関する表現

3「物語にみる女性に関する記述」で取り上げた物語のなかで、女性を表す単語は16種類あった（表1）。これらのなかで最も多く登場する女性は、妻 (*hmt*) もしくは妻と同じ役割を果たしている女性である。妻 (*hmt*) 4人に加えて、「マアト（真実）とゲレグ（嘘）の物語」の母親 (*mwt*) も、主人公の立場からは母親であるが、夫を大切にしないという点でこの項に数えることが適当であると思われる。また、ウアブ神官の妻 (*hmt wꜥb*) も、ここでは神官の妻というより、家族のなかでの妻という役割に焦点をあてたため、妻として数えた。これらに加え、「二人兄弟の物語」に登場する弟の妻は、5つの単語 (*st-hmt*, *kꜣt tꜣhwt*, *irt hmsi*, *špst ꜥꜣt*, *špsyt*) で表現されているが、彼女もこの項に入れることとする。これら合計7人の女性のうち1人は登場のみ（「雄弁な農夫の物語」）であるが、「不運な王子」の妻以外は、5人とも悪い人物として登場する。このうちの3人（「ウェストカー・パピルスの物語」第2話のウバイネルの妻、「二人兄弟の物語」の兄の妻、同じく「二人兄弟の物語」の弟の妻）は夫を裏切って不貞を働く妻であり、「マアト（真実）とゲレグ（嘘）の物語」では、身分の低い夫を大切にしない女性として息子から非難されている。また、「ウェストカー・パピルスの物語」の第4・5話に登場するウアブ神官の妻は、女中と喧嘩し、折檻をするといった女性として描かれている。

次に多く登場する女性が、母親 (*mwt*) である。表1に見られるように単語としては、4つの物語の

17 A. H. Gardiner, *op. cit.*, pp. 30-36; M. Lichtheim, *op. cit.*, II, pp. 211-14.

なかに用いられていたが、「マアト（真実）とゲレグ（嘘）の物語」の場合は、前述したように妻の立場で捉えた。したがってここでは、「雄弁な農夫の物語」「二人兄弟の物語」「不運な王子」の3つの例について考察する。このうちの「雄弁な農夫の物語」と「二人兄弟の物語」の2つの物語のなかでは、母親は例えとして登場し、話の筋には関係がない。また、「不運な王子」では、母親が死んだために父親が再婚したが、その継母とうまくいかなかったという経緯を話すときに触れられるだけである。今回読んだ物語のなかには、悪く表現された母親は存在しない。

この妻の描かれ方と、母親の描かれ方を比較すると次のことが言えよう。女性は、物語のなかで、登場人物としての役割を果たすときは、基本的には良く描かれなかったのではないか。そのため、尊敬に値すべき母親は、あまり登場させることができなかったのではないかと思われる。

これらの他には、男性を楽しませるための女性の存在がある。これは、「ウェストカー・パピルスの物語」の第3話にでてくる *st-hmt* と、「ウエンアメン旅行記」に登場する *hsit* である。前者の *st-hmt* は、この単語自体は「若い女性」を意味し、特別な職業を意味するものではないが、後者の *hsit* は「歌い女」を意味し、このような職業があったのではないかと思われる。

5 まとめ

本稿では、理想的にステレオタイプ化された女性像ではなく、実際の女性像を構築するために、古王国時代から第三中間期に記された文学作品を対象にして検討し、特に「物語」に焦点を当てた。これは、男性によって書かれた物語のなかで、女性がどのようにして表現されているのかという観点から、実社会で女性がおかれていた境遇の一端をうかがい知ろうとするものである。

本稿で取り上げた6つの物語のなかで、女性に関する単語は、16種類見つけることができた。その中でも、1番多く取り上げられている女性の登場人物は「妻」(*hmt*)であったが、この立場で良く表現された人物はまれであった。「妻」の次に多く登場した人物は、「母親」(*mwt*)であったが、話の筋には大きな影響を与えることはなかった。

これらの他には、男性を楽しませるための女性が見られた。1つ目が、舟遊びで王を楽しませるための *st-hmt* である。この単語自体は「若い女性」を意味し、特別な職業を意味するものではないが、「歌い女」については、このような職業があったのではないかと思われる。また、女中の意味を持つ *wb3yt* という単語の存在からも、女性が従事した仕事の存在がうかがえ、他には上に挙げた *st-hmt* という同じ単語を用いているが、王の使いをする女性が存在した。これらとは反対に、弱い立場の女性を表す単語で、未亡人 (*h3rt*) や離婚した女性 (*wdʿt*) もあり、男性の保護を必要とする例として挙げられている。

女性を表す単語の種類から、当時の多様な女性の現実がうかがえる。さらに、女性が従事した仕事の例を集めていくことにより、社会における女性の現実的な役割の一端を知ることができるであろう。

本研究は、「文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業（平成20年度～平成24年度）」によって行われた。

	hmt	hst	wq'ti	mwt	wb'iyi	st-hmt	hmt w'b	kt' 3hwt	ir hmsi	šps' 'si	špsyi	hsti	wri	hwti	š'ri st-hmt	il-msyi
雄弁な農夫の物語	妻	未亡人	離婚した女性	母親	女中	若い女性	ウアア神官の妻	恥知らずな女	つれあい	「大いなる高貴な女性」称号	高貴な女性	歌い女	君主の娘	女王	娘	継母
ウエストカー・パペルスの物語第2話	悪				登場のみ											
ウエストカー・パペルスの物語第3話						男性を楽しむため										
ウエストカー・パペルスの物語第4話							子供を産む/ 女中と喧嘩し、折									
ウエストカー・パペルスの物語第5話					密告する											
二人兄弟の物語	兄の妻・悪			例え		1. 弟の妻を指す(結婚前) 2. 王の使い		弟が兄の妻を指して・悪	弟の妻(結婚後)	弟の妻が王と再婚して得た称号	弟の妻が王と再婚してから・悪					
ウエンアメン旅行記												主人公を慰めるため	主人公を助ける?	主人公を助ける?		
不運な王子	夫を守る			生い立ちの話のなかで											求婚の対象	主人公を家から追い出す
マアト (真実) とゲレゲ (嘘) の物語				夫を大切にしない												

表 1 古代エジプトの物語に登場する女性